



丸山正則著

「ドナーズ・ハイ」を読んで

荒川正昭

新潟日報事業社刊行の小説「ドナーズ・ハイ」を、著者丸山正則先生から御寄贈賜り、一気に読ませていただきました。先生は、永年にわたって上越市の県立中央病院麻酔科・救命救急センター長として活躍なされ、平成22年春より同じ上越市の厚生連上越総合病院救急科部長として精勤されておられます。

本小説は、医療をめぐる人間像を描いた医学小説ですが、より具体的には臓器移植、特に脳死患者からの臓器提供をめぐる医療関係者と遺族の苦悩、そこに到るまでの努力の足跡を記した、云々ば移植医療小説とも云うべき一書であります。

舞台は日本海側のある地方都市の基幹病院、交通事故で救命救急センターに入院した男性患者が治療の甲斐なく脳死状態となり、家族が医療スタッフや移植コーディネーターの説明を前向きに受け止め、希望を持って臓器提供に踏み切る過程が描かれています。とりわけ、救命に全力投球をする医師、看護師の活動、脳死状態に陥ってからの医療、移植のための臓器提供を申し入れる心の悩み、葛藤、一方、一家の大黒柱を失った家族が悔しさと悲しみを乗り越えて、移植を待ち焦がれる見知らぬ患者の幸せのため、自らの意思で臓器提供を決断するにいたる道筋が、鮮やかに提示されています。県立中央病院の救急医療の現場で献身的に活動され、自らの患者の臓器提供（心臓死下の腎提供）を手掛け、退職前に脳死下臓器提供の体制を作り上げた丸山先生であるからこそ、書くことが出来た物語であると思います。

本書のタイトル、「ドナーズ・ハイ」(donors 臓器提供者・high 高み)は、「クライマーズ・ハイ」から着想した先生自身の造語とのこと。先生の後書きを引用させていただくと、「この言葉から連想されるイメージは一時的な気分高揚を想像するかも知れないが、そこに込めた私の意図は、突然の家族の死という最も痛ましい悲しみの中にあって、臓器提供という行為が家族の悲しみを和



らげ、明日に向かう勇気を与えることもあるのだという思いもよらぬ事実を多くの人、なかんずく医師を始めとする医療者に知ってもらうことである」と述べていますが、ここに先生が本書を書くことを決意した原点があると思います。

本書は、医療を受ける側の一般の方々に、また、あえて誤解を恐れずに言えば、医師、看護師をはじめ、多くの医療職従事者に、移植医療、とくに脳死患者からの臓器提供による移植を正しく理解していただく、適切な教科書であると思います。しかし、それ以上に、卒業間もない研修中の若い医療従事者、医療教育機関に在学する学生、近い将来入学に挑戦する高校生に、是非とも読んでいただきたい啓発の書でもあります。

丸山先生の益々の御活躍を祈りつつ、本書推薦の一文とします。

(新潟県臓器移植推進財団理事長
新潟大学名誉教授)

発売元：新潟日報社

定価 (1,200円+税)